

前号作品評

——とりあえずという时限
での感想

寺島 珠雄

前号作品評、というものの、特に各作品に洩れなくふれて敷衍程度は何か述べる万遍なさに私は反対を表明していた。その私に、こんどはお役が廻ってきた。賦役労働とでも解すべきかなどと独笑しながら、しかしまあオレだってひとさまの作品に接してオレなりの感じは持つのだから、それを書いておくことを全然拒んでしまうのは無愛想だ、と思った。

けれどまた、前号作品評というものに反対なのはそのところ、つまり或る作品に（最初に）接したときの感じは、時間を経て変容することがいくらかもある、感じられなかった詩を感じるようになったり、わからなかった詩に理解が届いたり、それらと逆もまたあったりが自然なのに、あえて「前号」と期限つ

きの感じを、しかも「評」としてやることに気が持たないまぬからだ。いな、いまもなじまぬのは同じだなという思いもある。

前号（第4次36号）の作品のうち、作者あてに感想のはがきを送ったのは高島洋に對してだった。

高島の「墓参」は、いい意味での高島らしさがあり、時折り見る悪い方の高島らしさがない。いいとはなだらかさである。それは素朴と形容もできるだろう。なだらかさはほとんど成功していると私はくり返して読み、目をへだててまた読み、いまも読み、はじめの感じだった結びの一行、

逃げるように旧友の墓石をあとにした
ここがどうもという、いわば減点個所に變更なしを確認した。常套的すぎるではないかと思っているのである。ここまでなだらかでは困ると思っているのである。忘れてしまつたが、結び一行へのこうしたこだわりは多分高島へのはがきに書いたはずだ。書けなかったのはがきつきりしているのは、

反戦の地底の吹き夏の夜（傍点寺島）
の句を、作品が展開される以前に押し出してしまったことで、こういうこと、私も実はきらいではない。しばしばやりたがる。しか

この方は一定不変に活字化されて存在するのだが、こちらにすんなりとしみ通ってくるときとこないときがある。くり返し承知で、そこに私の「前号」を「評」することへの反対、いまは少し弱めて疑問があった。

少し弱めてみたのは、高島作品「墓参」についてこうして書いていると、書く作業を通じてもさらに感じ方が動いてくる、その動きの記録としてならまあいいのではとも思えてきたからだ。

高島の次に（詩のでき具合の一番と二番のことではない）立ち降り、佇む思いで読んだのは小宮隆弘の「無題」だった。

落葉に埋れた
命日のない死は腐葉土にからみ
その日には誰も知らぬ

詩の均衡上は急に転調して高音になったようでもある。だが、ずっと長く、こういう死のかたちを、さらに「誰も知らぬ」ということすら知られぬようなかたちに考えている私には、詩に即さない角度からと考えると考へさせられた。ただし別問題だから通過。

この詩、実はわかりにくいのである。というの、死者と「女が一人」の女、それから母も出てくるが、この三者とそれを出

しこの「墓参」という一篇の場合、右の俳句は効果を添えているだろうか。疑問だなと思つたのは初見のときでなく、目をへだてて読んでからである。時折り見る悪い方の高島らしさがないと私は書いてしまったが、この俳句を副題ふうにしたのは悪い方の高島らしさだと部分訂正しよう。大命題をぶつきらばうに、短絡的に言いたがるヘキが高島にはあるが、この俳句はヘキが置かせたのか。

こまかな点では「香華をたむけ」は初見から私には使えぬ形容と読んだ。しかしこれは高島としてのなだらかさのなかにほぼ溶解してしまふ。

高島の「墓参」に私が感銘を得たについては、まったくの偶然で、伊藤桂一の戦記小説を何冊もつづけて読んでいたときに36号が到着したということがある。伊藤桂一も元來が騎兵連隊の兵隊で中国を転戦している。もつと根源的には、高島とはちがった条件で、私はまだ生きており、あの戦争で死んでしまった同年兵やらそうではなかったのやらの思い出がいつも胸にわだかまっている、ということがある。

そうした読み手のよろもろには不変的部分と可変的部分がある。だからある一篇の詩が、

について書いた文章も興味ありと付記する。だが、そこで小宮の詩にも戻るが、レッドページとか朝鮮戦争とか、そういう事実が存在したということがいまはもうわかりにくくなっている今日の現状を、どう考えたらいいのだろうか。

そんな点がわかりにくい世代はわが「コスモス」にはいないのだと、居直るか自嘲するかですますならそれでもいいけれど。

さらに高島の詩まで戻ってとり出せば「河北省石家荘」や「娘子関」などの地名、無論のこと日本読みだが私はすぐ読めるし「コスモス」同人はすべてそうだろうが、これはレッドページより朝鮮戦争より古い時代の見覚え聞き覚えである。いまはどうか。

暮尾淳の「新年」のなかに、

「岸ヲオセ」から二十年も
とある。すでに然り、ましてやだ。

さて、誤解されぬための一言も書いておこう。私は「歴史的」になつてしまった事実をときほぐし、わからぬ読者にもわかるように詩を書くなどとは思っていない。土台おのれにできぬことである。けれども、ひとの詩を読むとそんなところで何となく考えこむに近い状態になつたりはする、それだけの話に

すぎぬ。

注目作品ではさらに申有人の「崔承喜」を何回か読んだ。舞踊家石井漢の伝記に弟子だった崔承喜も登場したなど思いついて出してみたが、申の「注」以上ではない。加えて思いついたのは、崔承喜を素材にした詩が十余年前死んだ詩人にあることで、大東亜戦争と称する以前に書かれたその詩もこんどあらためて読んだ。コビーを申有人に送ろうかと思つたがそれはしていない。ひとしく「コスモス」についても、36号では高島と申が例になつたように、はがき一枚即時に飛ばせたりためらいこんだりの後者が多いのが各号通じて私の実状だ。

近藤計三「国道170号線を…」と押切順三の「地方の風景」を上下に配した見ひらき頁はおもしろかった。近藤に「持て余しの古米」があらわれ、押切は「白穂」「アンドン穂」を書いている。近藤も私もいる大阪では銘柄米として宮城、新潟、石川、富山、滋賀、兵庫の米を見受ける。この二篇を並べたのが編集の企図なら、それはいい着目だった。詩としては私の百身体験から押切につき易い。

長さの指定を受けなかったので気まかせにしてきたらあと五行で九枚目がなくなる。そ

内容は何ら示されていない。八年前までは実在的な充実した日々があり、何らかの欠落でいまの亡命生活に入りこんだのだ、と想像するばかりである。

私に洗札を授けてくれた白衣の人よ
あなたはどこで生きていますか
会いにゆきたいのです

(IX三連から)

神からの別離が現在の亡命生活につながっているらしい。そのときのきっかけは不明である。亡命者といえば、ずい分以前のことになるが、神戸にはツビエトからの亡命者、白系ロシア人が大勢いた。表情はかげを帯び、静かにひっそりと暮らしていた。望郷の思いも深かったに違いない。崩れかかった洋館に猫と共にすむ老女の話は友人から聞いたときの深い思いは、未だに鮮やかである。国籍をもたないまま、老女も世を去っただろう。

『メランコリー・キャフェ』の心象風景の描出を、現実的な具体例を引いて語るのには当を得たことではないが、「亡命者」とそのむこうに存在する「祖国」という言葉は、作者の意図に反して、ではなく意図通りにであろ

こまで書こう。

万遍なく平均的にやる前号評に私は依然然対だ。教師が答案の採点しるようで味けない。自分の感覚が寄り添える作品について、寄り添いの素因や角度を評者側も提示してこそと思う。私もうまくできなかつたけれど。

詩集評

——「北帰行」の詩

和田英子

仙石まこと詩集『メランコリー・キャフェ』は題名の通り勤め先の近くの喫茶店で毎日昼休み時に同じテーブルに坐って書き、仕上げた作品集である。季節は夏の終り頃から秋口にかけて一ヶ月間、三十八才の現在の実在的な内面現象を自らに問い、詩に向って検証を求めた結果報告である。

おおかた詩集を出す場合は、既発表の作品をテーマ別、年代別等に分けて一冊の詩集と

奥付けによると、作者は一九四三年旧満州大連で生まれた、とある。作者の「祖国」帰郷願望と、深いところがかわり合っているのではないか。

いま、テレビジョンで作者と同じ出生条件の中国で育った人達が肉親に向って訴えているが、一番耳新しく強くひびいたのは、彼女らが使う「祖国」という言葉であった。何のためらいもなく素直に発言する言葉をききながら

亡命者の見る夢は祖国のことではない
望郷の思いは亡命者の実存を鋭くする
もはや習慣となった亡命生活
だが朝のコーヒーは未だ苦すぎる

(XII一連より)

という行を重ねてゆくと、一枚の布地の表裏のように、ポジティブな面とネガティブな面が重なって「祖国」を否定しつつ「祖国」のありかを探ねつづける作者の根元がうっすらと浮かび上る。

目を閉じる
波の音が聞こえる
幼ない日々が浮かんでくる

水平線に消えた汽船の中はぼくのすべては

しての体裁をととのえることが多い。この詩集のように未発表の詩を短時間にまとめた詩集はめずらしく、こういうかたちで詩集を出したいという話をよく聞くので、初志を貫いた仙石さんの意志の強さを思う。

ドストルックというメランコリー・キャフェは、会社や家族や町の人々とのつながりを絶ち、過去、現在、未来をなまませに攪拌した無菌状態のカプセルの様相を呈している。

アバシーの夏は去った
風はもう秋だ
目を閉じる

すべて私に起ったことは夢である

八年の不在
亡命生活に慣れたとは言わない
そして望郷はタブーだ

星を見上げる

青森のKに会いたい
亡命者同志の密かな話がしたい
にぎやかな星たち

そして孤独な星たち
身体がふるえる

(VIII一、二連)

詩によく出てくる「八年の不在」の具体的な

あった
それから久しくぼくはぼくに会っていない
不在のぼくに伝える声はない

(XII一、二連)

亡命者感覚は八年前ではなく、幼時体験にまで遡って作者の中に実存していたのである。『メランコリー・キャフェ』には、この世にはない憧憬の地として白夜の聖域があり、地上のもっとも静かな地として「青森・三内」が存在する。

この詩集が捧げられている倉内智男氏が在る場所である。畏敬してやまぬK氏への思慕を地図の上で沿ってゆくと、北への思いが際立っていることに気づく。

最初一読したとき、ふっと「北帰行」のうたを思い浮かべた。旅順高等学校の寮歌、立山で悪天候のため小屋に一日中溜っていたときに誰かがうたい出し皆でんでんばらばらにうたった思い出があるうたである。

「窓は夜露にぬれて都すでに遠のく 北へ還る旅人ひとり……」

作者の望郷の思いはどの辺りまでひろがるのだろうか。青森の三内を超え北上し、白夜が続く北極圏のあたりまで思いはのびるのであろうか。

勤め帰りの国電の中で、何度かよみ返し、作者が造り出した真空空間を探るためには、異国人のようなサラリイマンの中で『メランコリー・キャフェ』のページを繰るのがもっともふさわしい読み方だと、窓の外に向って対話をする。

(仙石まこと『メランコリー・キャフェ』風鐸舎・八〇〇円)

はなしの自由席

—ある回顧から—

長谷川七郎

一九三五年十一月の日本無政府共産党事件とは、私は無関係であったが「詩行動」を通じて植村諦や岡本潤との近所づきあいのようになかった。同じ杉並署に留置された。

縁辺が軽部清子や神近市子を動かしたりして四十日ほど釈放になった。

詳しいことは忘れたが、その時労働運動の

関係で引っぱられてきた同僚の男が、なにかの話しのおりに、思いもかけず労働者詩人としての私の名が持ちだされたのに、ついに私は名のりそこねてしまった。その理由は詩などにはさして関心があるとは思われない彼の話しが、工場労働者としての新しい詩人の出現という、労働者に力点が置かれていたからである。

そのころ高円寺の植村の家では、彼の人のせいにか、アナ系以外の詩人も多くあつまり、近所の関係で遊びに行っている中に幾人かはいつか私も見知るようになった。

そこで私も名前だけは知っている詩人から、私の作品から労働者であると思ひこんでいたので高く評価していたと、失望と軽侮の念をかくそうとしなかったのに、若干の工場体験を題材としたにすぎず、労働者を自称したことでもない私は困惑したことがある。

当時のマルキシズムの労働運動に於ては労働者、農民が、同伴者と称された知識階級に對して、一段上位に格付けされ、労働者は本質的に弾圧に強く、インテリは抵抗に弱いといった観念論が通念として罷り通っていた。文学一般についてもその影響は当然劣性なコンプレックスとして侵透していた。

二月十一日

緒方宗平

三々五々

すこし前かごみになって

楠の木立ちにつつまれた
神社の境内にきえていくのは

たしかにあの人たちである。

その人の名のもとに死ぬこと
むなしさ、

それ以上のものが
骨のなかまでしみこんでいるはずの

その人たちが
神社のまえにあつまって

あのうたをうたう。

軍艦マーチがなりたてて

巷を車ではしっているのは
黒の集団です。

一九八二年二月十一日。

曇り。

1982・2・13

を、親友の野長瀬にすら、ひたかくしにする、木山の不審な態度について、木山のプチブル的生いたちから述べている。(夕日の老人ブルース)中、木山捷平と私、傍点、筆者)「詩行動」のこともあり、高円寺の植村の家が実質上クラブのように利用され、常時そこにゆけば仲間のだれかに会えたとし、連絡がとれた。

岡本の家は歩いて近くの松ノ木にあり、秋山は上高田から、早朝の山羊乳の配達をすませるとよく顔を見せ、清水清は滝野川から三日にあげず通ってきた。

私はこれらのアナ系といわれる詩人との交遊の中から、確実にある雰囲気を感じとっていた。

プロレタリア運動の末期的現象として、インテリと称された同伴者が、労働者と同調するために、うまいものやロマンチックな恋愛をもとめるかわりに、腹一杯の食い物、階級斗争に役立つ生産的(?)な男女の結合と偏見が強いられた。

そんな当時の画一的な政治理念からの拘束に對して、「詩行動」の詩人たちから私は、理論的ではなく、日常性の中から、それらの

秋山清が坂本遼の詩集「たんぼ」の中の「お鶴の死と俺」を引用しながら「私は彼の学業や村の家格などからいって彼の詩の中の生活苦と善良さは誇張がすぎるのではないかの思いを容易に消すことができない。彼の詩が抒情的に見えて、リアルな傾向も、そのうたがいを深めるものでなく現在といえどもその詩の切実感がかえって私にその不安を誘う……」と坂本の詩で誇張された貧農生活の表現と彼の生いたちとの関連に触れている。(コスモス 八一年一〇月号)

また坂本と同系列の詩人と目される木山捷平についても、野長瀬正夫は「こうした彼(木山)の秘密主義——要心深さは何から困ってくるものなのか私には不思議でならなかったが、この謎は、貧農的立場から歌いあげた彼の詩集「メクラとチンパ」や「野」が逆説的にこれを説明する一つの鍵となるかもしれない。つまり彼は自分の詩人的立場を擁護し正当化するために、比較的富裕な家庭に育ったことをひた隠しにしておいて、自分があたかも貧農の伴であるかのように見せかけておきたかったのではあるまいか……」と木山の弟が高等農林に入学したらしいことや、木山の生家から送られてきた木山果樹園という包装紙

観念的傾向に對する強い反発の姿勢を感じていた。

「詩行動」と同じ時期に、菊岡久利、岡本潤の編集による「反対」という雑誌も、その内容は明確な理念や指向性を持つものではなかったが、当時の諸々の社会的矛盾に對する体当りの抵抗を意識したもので、八つあたる的ふんまんの捌け口としてその題名が象徴しているように思われた。

植村の家で夜が更けるまで、無頼な文学論に興じた翌朝はやく、敷きぶとんの下から、きちんと寝押しをした、家庭染料でまだらに染めあげられたズボンを身につけて出勤する植村の、小市民的で律気な一面を、私はある感動を交えた気持でながめていたことなども、意をつくさないこの短文の中で、私の言いたかったことの、どこかにつながるような気もする。

編著代表伊藤信吉で『学校詩集』一九二九年版が復刻された。コスモスの関係では、伊藤和、岡本潤、小野十三郎、局清(この経緯は注になっておもしろい)らの名前がみられる。発行所は麥書房(東京都世田谷区代田四丁目三七ノ一二)で、定価は二五〇〇円。

街で

山野 千エ

街を歩いていると
ふいに
強い視線のようなものを感じることがある。
気のせいだと思いなおして
また歩きはじめるのだが、
そんなときまって
旅先きの美しい街を見た
物乞いの老人のことを思い出している。
あの日
何処へ行っても二度と老人のような人に
出合わなかったのだが、
今改めて
あの街の老人のくらしを考え

そついう毎朝、
そついう8時13分。
決意してつぎの駅で降り
突出にむかって歩きはじめる。
まあたらしい鉄条網の
わずかな切れ目を見つけて入りこむ。
背丈をこえるすすきが
びっしりと生え
かきわけて進みだすと
足元に流れがあらわれたりする。
ふと視界がひらけて
突出はあった、
いつものあの形がぐんと近くなって。
わたしは足をはやめる、
すすきのむこうに消えた突出をめざして。
それにしてもこのたくましい茂りようだ、
油断をすれば葉っぱにあたって
血がにじむ。
すすきがとだえ

更に

この街のこの頃の
くらしを考えているうちに
この街の何処かに
あの老人がいるような気がして来た。

探検

西 杉夫

なだらかなひろがりから
それは突出する。
草におわれながら
とどころ黄色い地肌をむきだしにし
二カ所でくびれて立つ異様ぶり。
通勤快速がカーブをすぎて
ぐうんとスピードをあげはじめるあたり
一瞬のうちにそれはすぎさるのだ、

あらわれた突出はあきれたことに
さっきと同じ距離なのだ。
みごとに晴れていた空に雲がふえて
風がしめりをおびてくる、
地肌が黒っぽくかわりはじめる、
急がねばならぬ。
すすきのあいだを見えかくれする
通勤快速のオレンジ色、
あのなかからながめてだけいた突出に
いま立ちむかって
しかし容易に近づけぬ。
すすきははじまって
わたしはしゃにむに進むが
もう切れ目はなく
方向もわからない。
会う約束だった印刷会社営業部員のめがねの飴色、
定例販売会議。
つかれはてて見あげる空の
このうすねずみ色からすると

夕ぐれが迫っているらしい。
いちめんのすすきの
いっそうの密生。

去年のくれ以来

寺島珠雄

柿が

ひとつもなくなった。

二月末だ。

ひよろっとした木に不釣合な数の柿が

見えてきたのは去年のくれ。

国道沿い角地のビルが解体されたとき。

ひよろっとした木は西南の蔭に実をつけていたの
だ。

以来 たいていは注目して通ったはずだが

ひとつもなくなっただけ

柿の減少過程をまるで覚えていない。

新聞がたまる。

はじめ 記事が大きくて切抜きに適さぬから
一頁まるまるに保存したのが習いになって

小さな記事の日もそうやって重ね

今日も重ねた。

去年のくれ 十四日以来の新聞。

ポーランド が

ぶあつくずしりと手にこたえ。

それだけであることが胸にこたえ。

「関心」というものに関心する。

○

ピウスズキー元帥の像／グダニスク（ダンチ

ツヒ）市遠景／ウエスタブラツテ要塞炎上

／聖フロリナヤ寺院／破壊された労働者共済

組合住宅（郊外コウオ）

もっとたくさん写真をながめる。

見知らぬ国を思わせた最初の本

昭和十六年十月新紀元社発行 林富子著

『ワルシャワ悲歌』にそれはある。

同じ名の本をまた読みそうな気分を抱えて

ちよっと外に出て交叉点まで行こう。

向う側空き地の隅の

ひよろっとした柿の木をながめに。

(82・2・25)

涅槃

本田晴光

爪をたてられた空は そこから縦に裂け

やぶれた皮膚に つぎをあてている寒気

ひびのはいった ガラス窓に

震えながら はりついた「涅槃」

ポロポロになった 声が

もつれこんだ 喉仏

あさましさの果てに 突き出た顔

肉が落ち 目がくぼみ 頬骨だけが光っていた

拒み続け こらえつくし

とうとう こらえきれなくなった かなしみが

べっとりと 額をぬらした

団地の夜は そのおもさですっぽり沈んでいる

男は 帰ってきた

くらいやみの中で エレベーターの止まる音がし

て

鍵のかかった 九〇四号室にはいっていく

誰もいない 男の部屋に

釘の折れた年月が くもの巣をはり

湿ったしびい過去を かさねている

男は あぐらをかき

記憶を確かめるように 話しかけた

広い海があっただよ

その海をこえて 帰ってくるには

兵隊たちは 死ななければ

その海をこえて　ここへは帰ってこれなかった
んだよ

戦争にいった男はだれでも　何かをなくした
戦争で死んだ男は　人生をなくした
人生ってわかるかなあ　ひとが生きてくってこと
だよ

俺は人生をなくすかわりに　両脚をなくしてしも
うた

男は　もう見えなかった

団地の夜は　さびしく耳をふさいだ

*「涅槃」……香月泰男「シベリア画集」より

子供たちの瞳が

野口清子

庭で

冬がいたり　戻ったりしている

梅の花を咲かせ

その上に雪降り積り
ふきのとうが

うすみどりの花を咲かせ
ぼたん雪が降っては消える
みぞれ道

やせこけた一匹の黒犬が走ってくる
首に荷札のような手紙をつるし

「助けて！　と書いてあった

道に迷っています

五十五名です　この犬が案内します」

ポーランドの雪は深い

子供の書いた字だった

百姓たちが　それを読んだとき

一年半すぎていた

犬は飢えて死んでしまった

それきり　帰ってくることのなかった
子供たち

私の眼に焼きついている

吹雪の夜　「たすけて」と書いた

子供たちの眼が

子供たちの声が

ラムペイエ夫人は……

仙石まこと

ラムペイエ夫人はシャムネコの首を締めた

ラムペイエ夫人は串カツランチを食べた

ラムペイエ夫人は大声で笑った

ラムペイエ夫人は鼻の穴をふくらました

ラムペイエ夫人は男のズボンをはいた

ラムペイエ夫人は「こまったものね」と言った

ラムペイエ夫人は椅子を犯した

むごたらしい戦争だった
ナチスがポーランドを襲ったとき
人間を村を焼きつくした

親を亡くした子供たち

兄弟にはぐれた子供たちが

焼けあとから　木蔭から　道端から

飢えて　ひとりぼっちで歩き出し

隊伍をくんで歩きだした

恐しい戦争から逃げたかった

やすらかにねむりたかった子供たち

音楽家がい

焼けあとで拾った笛を吹いた

互いに教えあう　学校もあった

隊長もいて　みんなをはげました

雄々しく生きた子供たち

やすらかな眠りもなく　食もなく

ラムペイエ夫人は「カア・カア」と鳴いた
ラムペイエ夫人はサンドイッチマンになった
ラムペイエ夫人はナポレオンを妊娠した
ラムペイエ夫人はバラの花炒めを食べた
ラムペイエ夫人は神父を抱きしめた
ラムペイエ夫人は三人の乞食に愛を与えた
ラムペイエ夫人はタバスコジュースを飲んだ
ラムペイエ夫人はウンペラモーゼ伯と決闘した
ラムペイエ夫人はペニスが生えた

大ふく

緒方宗平

スーパの前でバスをおり
古い住宅の並ぶ入口の
酒と食料品をならべた
小さくひなびたその店を
たずねてついたとき

しとしとと暮秋の雨が落ちてきた。
たずねるその人は
ストーブをだいていた。
むこうに行ったら
訪ねてほしいと
なかまに両親へのことづけをたのまれた。
来意をつげると
六十をすぎたとおもえるその人は
椅子をすすめ
不景気のうえに
スーパまでできてと
さきざきのことを愁えた。
耳をかたむけ
言葉にまよいながら
おいと呼ばれてでてきたおばさんに
お茶と大ふくをいただいた。

1981・11・25

遺孤遊子(二)

宮田正平

今さら何を問われても
言うことはありません
敗戦後やがて四十年
半世紀に近い時が経ったから
もう何も彼も忘れてしまいましたとは
間違っても申しません

父祖代々
東北小作の貧農が
自分の農地を持てることを夢に
若かった私たち夫婦は
胸ふくらませて
満洲に骨を埋める覚悟で

故郷を捨てたのです

(自分の農地を持つこと
そのことが じつは
中国農民の土地を
とり上げることになるとも知らず)

ポツダム宣言の直前
いち早く進攻したソ連軍に
開拓団はあわてふためき
ただ祖国恋しさの一心から
ある人は
中国人に子どもを預け

(ほんとうは 帰郷のために
重荷になる子どもをくれてやり)

ある人は
女の子が五百円 男の子が三百円で
奴隷売買さながら
人が人を
いや こともあろうに
親が子売りに
あるいは置き去りにし
いまその子どもたちが

四十代の壮年となり
つれあいがあり
人の子の親であるはずで
その子どもたちは
七千人とも一万人ともいわれます

その中に私の息子もいるでしょう
捨てたとは思いたくありませんが
連れて帰らなかったのは事実です
その子の成人した姿を
見たいと思えます

会いたいと思えます
しかし いまになって
探すことも 会うことも
許されないことだと思っております
その時 私たちに
どんな理由があったにせよ
手離し別れたその日から
もう親子ではないのです
あの子はもう中国人です
見たいと思ひ 会いたいと思ひ
私たちの悩み苦しみは

私たち夫婦が求めて背負った
生涯の十字架です

○

昭和二十一年の七月初め
中共八路軍治下の安東(註1)を脱出
千山山脈を突破する脱出行は
国民政府治下の奉天(註2)を目指して
山岳地帯を行く
蜿蜒二百六十キロ
野宿 暴民の略奪 逃避
そして野宿
そんな明け暮れの
十数日目の夕ぐれ
山林地帯で待伏せていた「買小孩(註3)」
手に手に札束を振りかざし
「女の子五百円 男の子三百円」
娘を庇って身を潜めていた母にも
手がのびて 五百円をつき出す
父はその足もとに土下座して
必死に「救命呀(註4)」を叫び
哀願をくり返し

苦難と困窮に耐えて

一家そろって 辛うじて

帰国した人もあるといひます

○

日本が負けたと知って
二十一年二月
とるものもとりあえず
乳呑子をねんねこで負い
新京(註5)から大連へ
無蓋車の それも
ステップに縋りついたまま
無我夢中で南へ逃げる途中
気がついて見ると
負った子が
零下三十度の寒風にさらされたまま
凍え死んでいたといひます
預けられず 売られず 捨てられず
母の背の温もりの中で
寒さに凍えて死んだその子は
まだしも幸せだったといえるでしょう

○

万に近いという子どものなから
手を尽くして探し求め
夢にまで見た娘さんに
会うことができたあなたは
お母さん ほんとうに
数少ない幸運な人です
その上 その婿と三人の孫の
娘一家を呼び寄せ
いっしょに暮らせるあなたは
何と恵まれた幸せな人でしよう
しかし 一家団欒も東の間
残念なことに 一年と経たず
娘さんの夫は ふたたび
中国に帰ってしまったといひます
生活習慣の違いもあったでしょう
何より 言葉の難しさが
日本の生活に馴染みにくい
大きな理由だったでしょう
言葉の障碍は いきおい

就職の道を阻むことになりす

お母さん あなたは

娘さんと再会できた喜びから

言葉の違いも不便も承知の上で

四十年 何も彼も

中国人になりきって来た

娘夫婦の一家を

日本に 自分の手許に

呼んだのではなかったのですか

ところが 驚いたことに

お母さん あなたは

言葉が通じないのだから

仕事にありつけないのはあたりまえ

どのみち日本での生活は

うまくいきっこないと

母であることを楯に

日本人ではないという

ただそれだけの身勝手な理由で

娘とその夫の別れを

まるで生木を裂くように

当然のなりゆきというのでは

島国根性の心の狭さの

言訳にはなりません

——子どもを連れて帰ってきなさい

日本での暮らしに見切りをつけて

中国に帰った夫から

たびたびの手紙だといひます

——お母さんには

私たちが夫婦の 夫の気持を

分かろうとしてくれないのです

せつかくめぐり会えた娘さんに

お母さん あなたは

自分本位の考えで

もう一度 娘さんに

泣きを見せようというのですか

そして さらに

永い年月 娘さんを

実の子同様慈しみ育ててくれた

中国の養父母に

何と説明できますか

○

開拓団に夢を託して

前後の考えもなく故郷を捨てた

私たち夫婦も

とうに六十をすぎました

いまさら何を訊ねられても

もう何もいうことはありません

求めて背負った十字架が

老いの肩に重く苦しく

ただただ 私

沈黙を守るしかないのです

(註1) 安東||現丹京

(註2) 奉天||現瀋陽

(註3) 買小孩||子ども買

(註4) 救命呀||助けてくれ

(註5) 新京||長春の旧称